

# 砂防一路へ

## 砂防一路シリーズ 第2回

### 1. 第一高等学校に入学 明治41年(1908年)

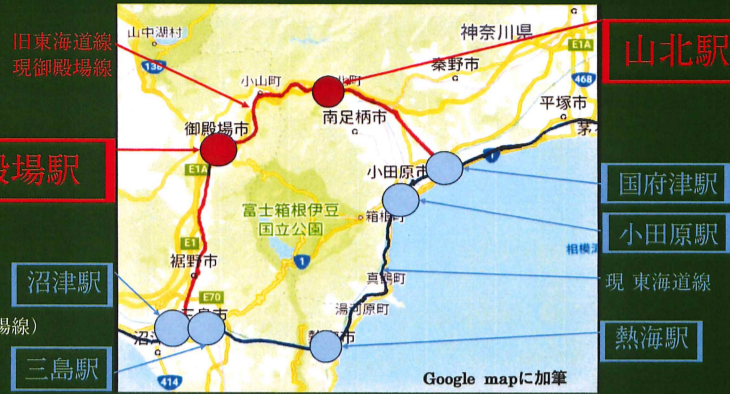
赤木正雄は兵庫県中筋村(現 豊岡市)の中筋小学校、豊岡中学校から明治41年(1908年)第一高等学校に進む。

夏休みを故郷で過ごした赤木は、帰京の途次、台風の災害に遭う。東海道線(現御殿場線)の線路はずたずたに切断流失しており、御殿場駅から山北駅まで徒歩でたどり着いたという経験をする。

明治43年(1910年)のことである。

### 旧東海道線

赤線:昔の東海道線(現 御殿場線)  
青線:現在の東海道線



### 2. 明治43年(1910年)の災害 明治43年(1910年)

明治43年8月、梅雨前線と2つの台風によって東海・関東・東北地方などで大変な災害が起こった。軽井沢に滞在していた桂太郎首相は信越線が不通で、急遽篠ノ井線・中央線で帰京するが、途中車窓から水害や土砂災害のすさまじさを目のあたりにする。

首相は帰京後、すぐに『治水問題は重要な問題で姑息な計画ではなく、永遠にわたる一定の治水計画を定め、国土の安全を図ること国家100年の計画である』として、若槻礼次郎大蔵次官に治水・砂防・治山の早急な対処を指示する<sup>1)</sup>。そして、政府は臨時治水調査会を設置し「第1次治水計画」を決定する。これは初の治水長期計画で後の我が国の治水計画の基本となった。

### 4. 東京帝国大学で砂防を学ぶ

新渡戸校長の訓辞によって自分の進むべき道を決めた赤木は、東京帝国大学農学部林学科に進み、ここで諸戸北郎教授に師事し、砂防工学を学ぶ。(写真:東大学生当時、諸戸北郎教授と学生の集合写真)

大正3年度東京帝国大学農学部林学科卒業生写真 (東京大学砂防研究所蔵)

右は左の写真の黄色部分の拡大  
左下:諸戸北郎教授 右上:赤木正雄



### 3. 治水・砂防に一生をささげよう 新渡戸校長の訓辞 明治43年(1910年)

難渋の末帰京した直後、赤木は9月13日の第一高等学校の始業式で新渡戸稲造の訓示に感銘を受ける。赤木は3年生だった。赤木は『砂防一路』<sup>2)</sup>にこう記している・・・新渡戸稲造校長の訓示

明治四十七年九月に我が国は颱風による大水害を受けた。丁度その頃、私は第一高等学校に在学中で、夏休みを郷里の但馬で過ごし、いよいよ開校も近づいたので、独り上京の途に上ったが、生憎この颱風にぶつかって東海道線(現在の御殿場線)は御殿場から少し進行するに止まり、線路はずたずたに切断流失しており、御殿場駅から山北駅まで徒歩でたどり着いたという経験をした。ここから始業式の第一高等学校の集會に帰ってきた。



第一高等学校  
明治22年(1902年)3月竣工  
所在地は東京・本郷  
大正12年9月(1923年)地震の為大破



新渡戸稲造<sup>3)</sup>

そして、自身の生家が円山川の氾濫で幾度も被害を受けてきたことや、帰京途中の東海道線での難行を身近に経験していた赤木は、一生を治水・砂防の仕事にささげようと心に誓ったのである。

また、のちに東大総長になった矢内原忠雄<sup>6)</sup>は、一校の新入生として新渡戸校長の訓示を聞き書き留めていた。著書『余の尊敬する人物』<sup>7)</sup>の中で次のように記している。

『この八月は誠に忘れ難き月である。一つは全国各地の水害で、損害額三千萬圓内外といふことである。世間には、或は洪水の為に土地が肥えた處があるとか、土砂がタスカロラ海床を浅くしてそのために地震が少なくなるだろうとか、土砂が多く海中に入ったために魚族が繁殖するだろうとか云ふ人もあるが、こんな事は當てにはならぬ。この三千萬圓は先づ絶對的の損失と見ねばならぬ。我輩はその時強く思ったことであるが、わがこの一千の諸君の中からその一生を治水の為に捧げる人はいないだろうか、植林の為に捧げる人はいないだろうか、又水害後の救済事業に志のある人はいないだろうかと思つた。』



第一高等学校、東京帝国大学法科大学卒業、  
新渡戸稲造の感化を受ける。東大総長



「余の尊敬する人物」<sup>7)</sup>

### 5. 内務省に採用 大正3年(1914年)

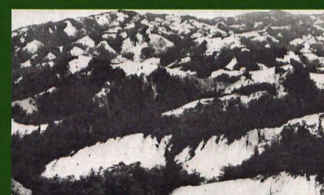
赤木は治水・砂防を実践するためには内務省で働くことが最善と決め、内務省に沖野忠雄技監を訪れて自分の硬い意志と熱い気持ちを訴える。沖野技監は、砂防は誰に学んだか、植林は誰に学んだかと聞く。砂防は諸戸北郎教授に、植林は本多静六教授に学んだと答える。

沖野技監はそれを聞いて、その場で赤木を採用することに決めたと言う。本多静六教授は造林学の分野の第一人者だった。内務省には土木の技師は沢山いるが、禿禿地が広がる荒れた山の手当には植林が重要と考えていた沖野技監は林学士の採用を望んでいた。こうして、**林学士の技師**が誕生した。

内務省に採用された赤木は、沖野技監の方針通り滋賀県の田上山の禿禿地の山腹砂防工事に従事する。ここで、砂防工事、とりわけ山腹工の優れた技術者、井上清太郎技手に出会う。井上技手から山腹工技術をしっかりと学ぶ。いよいよ赤木は砂防の仕事につき、新渡戸校長の訓辞に応える『砂防一路』が始まった。



左から3人目が井上清太郎、その右隣りに赤木正雄  
内務省大阪出張所 下田上山工務所技手



禿禿地の広がる田上山 (滋賀県)<sup>8)</sup>

のちに赤木は沖野技監が自分と同郷の但馬の人であったことを知る。沖野技監も赤木にこのことは言わなかった。赤木は、自分の故郷にこのような偉大な人がおられると言うことに大変な誇りを持ったと言う。

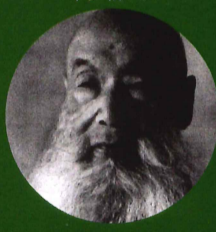
沖野技監は後に「治水の神様」と言われるようになり、赤木正雄は「砂防の父」あるいは「砂防の神様」と言われるようになる。但馬(兵庫県)の産んだ2大偉人と言える。

沖野忠雄<sup>8)</sup>



兵庫県出石町出身初代内務技監

本多静六<sup>9)</sup>



東京帝国大学林学科教授

#### 【参考文献】

1) 建築学会:明治大正建築写真集、建築学会、1936.12  
2) 旧東海道線路線図:Google  
3) 前田多門、高木八尺:新渡戸博士追憶集、故郷新渡戸博士記念事業実行委員、1936  
4) 武井高:我が国における治水の技術と制度の関連に関する研究(昭和36年9月)複製版、神吉和夫、2017.6  
5) 赤木正雄:砂防一路、(社)全国治水砂防協会、1963.7

6) 小学館:日本大百科全書、1988.9.1  
7) 矢内原忠雄:余の尊敬する人物、岩波新書、1940.5  
8) 土木学会沖野忠雄研究資料調査委員会:沖野忠雄と明治改修、土木学会、2010.3  
9) 日外アソシエーツ(株):昭和人物事典前期、紀伊國屋書店、2017.3

■ 次回はオーストリアへの留学を紹介する。